

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第	号	氏名	松本 恵太
審 査 担 当 者	主 査	石 竹 達 也		(印)
	副主査	赤 木 由 人		(印)
	副主査	藤 本 公 則		(印)
主論文題目： Chronic Rhinosinusitis is Associated with Airflow Obstruction in Japanese Never-Smokers without Asthma. (日本人における喘息のない非喫煙者の慢性副鼻腔炎では気流障害と関係性を有する)				

審査結果の要旨（意見）

本研究は、日本人の慢性鼻副鼻腔炎が喘息既往のない非喫煙者において、気流障害の独立した危険因子になり得るかを検討した臨床研究である。アウトカムである気流障害は1秒率（1秒量/努力性肺活量）＜70%および正常下限5パーセントタイル未満（＜LLN）＞を用いて評価を行っている。研究デザインは横断研究であるので、因果関係については言及できないが、多変量解析の結果、非喫煙者においても慢性鼻副鼻腔炎が統計学的に有意に気流障害の危険因子と関連していることを示し、気流障害の予防対策として、早期に慢性鼻副鼻腔炎への対応の重要性を示唆するなど、学位の授与に値するものと評価した。

論文要旨

慢性鼻副鼻腔炎が気流障害の独立した危険因子になり得るかを検証した。気管支喘息のない40歳以上の日本人158人を対象に、慢性鼻副鼻腔炎のある非喫煙者および喫煙者、慢性鼻副鼻腔炎のない非喫煙者および喫煙者の4群に分けて、それぞれのグループ間で気流障害の結果を比較し、また慢性鼻副鼻腔炎の重症度と気流障害の相互性について研究した。ただし、気流障害は1秒率（1秒量/努力性肺活量）＜70%および正常下限5パーセントタイル未満（＜LLN）＞を用いた。慢性鼻副鼻腔炎は顔面CTにおけるLung-Mackayスコア（LMS）を用いた。

結果として、非喫煙および鼻副鼻腔炎群において気流閉塞（1秒率＜0.7および＜LLN）を有する比率はそれぞれ22.7%および18.2%で、非喫煙および非鼻副鼻腔炎群の4.3%および4.3%より有意に高かった（ $p<0.05$ ）。また、喫煙者で鼻副鼻腔炎における気流閉塞を有する比率はそれぞれ、40.7%および44.4%で、非鼻副鼻腔炎の27.5%および30.0%より有意に高かった（ $p<0.05$ ）。多変量解析の結果から、鼻副鼻腔炎が気流閉塞を有する相対危険度（95%CI）は1秒率＜0.7および＜LLNで、それぞれ3.3（1.5-7.5, $p<0.05$ ）および3.0（1.4-6.8, $p<0.05$ ）であった。

結論として、慢性鼻副鼻腔炎は非喫煙者および喫煙者において気流障害の独立した危険因子であると考えられた。